

はじめに

医療の高度化、多様化は、これからの看護に十分な知識、正確な判断力、状況への対応力、さらには看護実践の科学的根拠を探究する能力などを求めている。しかし、それが看護に波及しどのような枝葉が伸びようが、看護実践能力を育成する上で重要となるのは、人間を対象として活動する「看護ケア基盤形成の方法」と、実践力を育成する基本的な「看護基礎技術」の学習であり、その根や幹が看護実践能力を強化する教育内容のコア要素として位置付けられる。

本書はこの考え方に準拠し、平成16（2004）年3月に、「フィジカルアセスメント」の教科書としてスタートした。その当時、「フィジカルアセスメント」に特化した教科書はほとんどなく、講義・演習を行っている養成機関も少なかった。その後、フィジカルアセスメントは急速に看護界に浸透した。看護援助を提供するための大前提は、人間の身体に関する理解であり、①身体の構造についての理解、②身体の構造と機能との緻密な関係性の理解、③それらの知識を基盤に生活者として目の前にいる人の身体の状態を把握する能力である。そして、この能力を育成することが、患者の異常を早期に発見する基礎力の習得や、効果的な看護援助の提供につながると考える。このように「身体の構造と機能に強い看護職者」を教育する第一歩として、フィジカルアセスメントは大変重要な教育内容である。

看護基礎教育においても、平成21（2009）年4月の保健師助産師看護師学校養成所指定規則のカリキュラム改正で、フィジカルアセスメントが強化項目として導入された。そして現在、令和7（2025）年に向けて在宅ケアの時代へと移行するなか、より一層臨床判断能力が求められ、令和2（2020）年10月保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令において、臨床判断能力等に必要な基礎的能力の強化のための解剖生理学等の内容の充実が図られ、単位数が増加された。

本書は当初より、解剖生理学の既習項目のポイントを提示し、ゴードンの11の機能的健康パターンで患者の情報をとらえる方法に加え、マズローの基本的欲求の階層の理解、さらにヘンダーソンの基本的看護の視点から、「フィジカルアセスメント」がどのように看護援助と結び付いていくかという構成にした。このことにより、ゴードンの機能的健康パターンの枠組みで事例を展開した場合だけではなく、患者のニーズから必要な看護援助を導き出すヘンダーソンの理論で事例を展開した場合に、どのような援助方法を導けるかについても説明を加えた。さらに平成30（2018）年の改訂第5版では、皮膚表面から身体の内面をどのようにイメージさせるかにこだわり、写真の上から骨や筋肉の図を重ねるなどの工夫を施した。

そして今回の大幅な改訂においては、基礎看護技術全般を再考し、「フィジカルアセスメント」を看護実践の基盤をつくる技術としてとらえ、さらに、同様な基礎的基盤をつくる技術として、「コミュニケーション」および「看護の展開」を合わせ、『基礎看護技術Ⅰ（基礎看護学②）』として一冊にまとめることとした。先に述べた令和2年の指定規則の一部を改正する省令では、若い世代の人間関係の希薄化や生活体験の不足が指摘され、信頼関係を構築する能力の向上や、コミュニケーション能力の強化、また看護の対象や療養の場の変化に伴い、対象の多様性や複雑化するニーズを理解する能力の向上が求められている。こうしたことが背景となり、「基礎看護学」は、臨床判断能力や倫理的判断・行動に必要な基礎的能力を養うための演習の強化として1単位増加となった。さらに、看護師教育（看護学教育）の技術項目と到達度が整理され、基礎教育において到達度を示す「技術」はテクニカル・スキル（手技）であると整理され、技術提供の前に行う対象の観察やアセスメント等を含まない表現とされた。つまり、この表現はテクニカル・スキルの前提に対象の観察やアセスメントを位置づけるものであり、対人関係の形成能力や、フィジカルアセスメントを含めた看護過程を展開する能力の醸成が極めて重要であることを指摘している。本書においてもこの改正の方向性に従い、技術提供の前に行う対象の観察やアセスメント技術、つまりコミュニケーションやフィジカルアセスメント、それらの看護を展開する技術を『基礎看護技術Ⅰ（基礎看護学②）』とし、テクニカル・スキル（手技）を看護実践の基盤となる技術として『基礎看護技術Ⅱ（基礎看護学③）』にまとめることとした。

24時間365日、医療を受ける人々のそばで寄り添い支える職種が看護職であり、その立場を最大限に生かし、患者のニーズに沿った看護援助が提供できる能力を確実に育成しなければならないという熱望はさらに高まっている。その基盤をつくる基礎的な技術として、「コミュニケーション」「看護の展開」および「ヘルスアセスメント」を本書で学び、一人ひとりに合わせた看護援助を導き出す一助になれば大変嬉しく思う。基礎教育のテキストとしてはもちろんのこと、多くの看護職者の方々に活用いただけると幸いである。

編者一同